

にいがた

北から南から



教員生活を振り返って

和 澄 利 男

一 はじめに

三月末に、定年退職をした。ついこの間（一九七九年）勤め始めたばかりと思っていたが、いつの間にか三六年経過していたのだ。教員になり、当然のごとく、すぐに組合に加入した。そして、間もなく次の詩を知った。

戦死せる教え児よ

逝いて還らぬ教え児よ

私の手は血まみれだ

君を縫ったその網の端を

私も持っていた

しかも人の子の師の名において
嗚呼！

「お互いにだまされていた」の
言訳がなんでできよう

慚愧 悔恨 懺悔を重ねても
それがなんの償いになろう

逝った君はもう還らない

今ぞ私は汚濁の手をすすぎ

涙をはらって君の墓標に誓う

「繰り返さぬぞ絶対に！」

一九五一年に高知県の教師、竹本源治さんが
作った詩である。

真壁仁編『詩の中にめざめる日本』を読み、
この詩が作られた頃のことを知った。

「一九五一年という年は日本の教師、教師
の組織にとつて大変重要な年であった。一月
にひらかれた日教組中央委員会をはじめ
「教え子を再び戦場に送るな」というスロー
ガンを掲げ、五月城崎大会でそれを全組織の
ものとした。（中略）十一月には第一回教育研



究集会が日光で開かれた。民族独立のための教育、平和のための教育がすべての教師大衆の課題となった。学者、文化人たちが、平和の擁護は五十万教師の良心と知性にかかっていると訴えたのもこの年である。」

二 理科でも平和学習を

平和のための教育というといえば、すぐに社会科学と思われる。しかし、理科でも、トピックス的だが平和の大切さや戦争の悲惨さ・愚かしさを生徒たちに伝える（知らせる）学習（平和学習？）は可能である。例えば、次のようなことを折りに触れ、取りあげてきた。

一年生の学習

- ・ 状態変化の学習で、原爆が爆発した直後の物質の様子（鉄でさえ一瞬に気体になるとそれを記録している原爆瓦の紹介）
- ・ 気体の学習で、初めて戦争（第一次世界大戦）で使われた毒ガスは空気より重い塩素であること
- ・ 大気圧の学習で、七三二部隊が行った真

空室での丸太（捕虜）を使った人体実験の様子

- ・ 地震の学習で、地震と核実験の地震波の様子が違うことを利用し、核実験を感知するために地震計が世界中に設置されたこと
- ### 二年生の学習

- ・ 天気の学習の導入として、戦争が始まると秘密にされる天気図
- ・ 天気の移り変わりの学習で、偏西風を利用した風船爆弾と動員された女学生たち
- ・ 天気の学習のまとめとして、ヒロシマの黒い雨

三年生の学習

- ・ 慣性の学習で、飛行機から投下する物体の落下地点の予測
- ・ 原子の構造の学習で、核分裂を利用した原子爆弾の原理
- ・ 太陽の構造の学習で、核融合と水素爆弾の原理

福島原発の事故以降は、原子力発電と原発の違い、原発事故の概要とテロの脅威について

にいがた

北から南から



ては、特に時間をとって取り組んだ。

三 新潟市に勤務する教師として

この十数年来、三年生の夏休み前の二時間を「ヒロシマの黒い雨」をテーマに授業を行ってきた。

二〇一四年度の実践の流れは次の通りである。

・米軍作製の一九四五年八月六日の天気図から、当日の天気を予測する。

・当時、日本でも天気図は作製されていたが、^④抜いになっていたことを紹介する。

(歴史公文書探求サイト「ぶん蔵」参照)

・原爆投下直後の天気急変の理由を考える。

・映像『「ヒロシマ原爆、今語られる真実』の冒頭一〇分ほどを流し、投下までの経過などを知らす。

・黒い雨の正体が炭素であることを教え、地上にある炭素⇨有機物の発生源を考える。

・発生源として、亡くなった人の体も含ま

れていること、黒い雨は浴びた人に死も招く二重の意味で、死の雨であること伝える。

・『ヒロシマ原爆、今語られる真実』の最後の部分「ヒロシマ市の光景ほど平和を強く訴えるものはありません。原爆投下は無差別殺人です。我々は現実から目を背けてはなりません。原爆は多くの命を一瞬に奪うのです。」を流す。

・新潟市も原爆投下の候補地の一つであることを教え、新潟市非核平和都市宣言を紹介する。

新潟市非核平和都市宣言の中に、次のような一節がある。

「先の大戦で、わたしたちは、尊い生命や財産を失いました。新潟市は、広島・長崎と並ぶ原爆投下予定地のひとつでした。原爆を怖れ市民が一斉避難した日もありました。あれから六〇年。わたしたちは、現在のわたしたちの暮らしが、戦争による多くの方がたの尊い犠牲の上に成り立っていることを忘れてはなりません。そのことを後世に伝えてい



かなければなりません。」

この宣言が出て以来、新潟市の中学校に勤務している教員の責務として、原爆のことを扱わなければならないという思いを強く感じ、実践してきた。

四 終わりに

戦後七〇年の今。

受験が近づくと、陸上自衛隊高等工科学校への受験を生徒に紹介するように、現職自衛官が新潟市内の中学校を回っている。国会で審議されている「戦争法案」が成立したら、どんな前口上を述べて、受験を促すように話すのだろうか。そして、教師たちは、再び教え子を戦場に送るようになるのだろうか。

教え子だけでなく多くの人、とりわけ大切な孫たちが戦争に行くことは許さない。そんな思いを強く感じている昨今である。

(わずみとしお・新潟市)

出会った子どもたち

堀川 孝明

障害児教育に33年携わり、たくさん子どもたちと出会った。3分も椅子に座っていられない子。真冬の川に裸で飛び込む子。家に帰ると言い、五泉から新津まで歩こうとする子。一番ではないと気がすまなく、泣き出す子。一人一人忘れられない子どもであり、私を励まし、育ててくれた子どもたちである。

友達がいれば

「先生、孝君、一人でスロープにいましたよ」と他のクラスの先生がいつものように教室に連れて来てくれる。「一人でどこかに行かないようにしてください」の言葉を添えて。校舎にあるスロープを上がったり下りたりす